

〔報告〕

赤ちゃんにやさしい病院 (BFH) における母乳育児支援の実態と課題

名 和 文 香¹⁾ 服 部 律 子¹⁾ 堀 内 寛 子¹⁾
 布 原 佳 奈¹⁾ 谷 口 通 英¹⁾ 大 法 啓 子²⁾

Report of Breastfeeding Support at Baby Friendly Hospital (BFH)

Fumika Nawa¹⁾, Ritsuko Hattori¹⁾, Hiroko Horiuchi¹⁾,
 Kana Nunohara¹⁾, Michie Taniguchi¹⁾, and Keiko Onori²⁾

I. はじめに

母乳育児推進は全国的な課題であり、母乳育児を支援するために様々な看護ケアが各施設や地域で行われている。21世紀の母子保健の取り組みである「健やか親子21」は、出生後1ヶ月時の母乳育児の割合が増加することを目標として挙げており¹⁾、専門団体や地方自治体がともに取り組んでいる段階にある。岐阜県でも「岐阜母乳の会」が発足し、母乳育児を推進する全県的な高まりが見られる。また、取り組みの一つとして、1989年にWHOとユニセフが発表した「母乳育児成功のための10か条」²⁾(以下、10か条とする:表1)を積極的に実践する産科施設(BFH:赤ちゃんにやさしい病院)が増えてきている。

しかし、全国的な母乳育児の現状をみると、2000年の時点で、生後4～5ヵ月での母乳率は35.9%であり³⁾未だ低い。そこで、岐阜県内の母乳育児を熱心に勧めているBFH施設利用者の、母乳育児に対する考えや、受けた支援の内容とその評価について検討し、BFHにおける実践からの学びをより多くの施設が取り組むことができるよう、効果的な支援を明らかにすることを目的とした。

II. 方法

1. 調査対象と方法

岐阜県内でBFHに認定されている産科診療所2件で出産し、出産後1年になる母親201名に質問紙調査表を郵送した。

2. 調査内容

調査項目は「妊娠中から母乳で育てたいと思った理由」7項目(1全くそう思わない～4とてもそう思うの選択式)、「母乳をすすめていることを知って選んだか」(選択式)、「母乳育児についての情報をどこから得たか」(複数選択式)、「妊娠中の病院の支援で役に立ったこと、役に立たなかったこと」(自由記載)、「妊娠中の家族や周囲の支援・助言」(自由記載)、「入院中の助産師・看護師の支援で良かったこと、良くなかったこと」(自由記載)、「母乳で育ててよかったと思うこと」(自由記載)、「退

表1 母乳育児成功のための10か条

- | |
|-------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 母乳育児推進の方針を文章にし、すべての関係職員がいつでも確認できるようにする。 |
| 2. この方針を実施するうえで必要な知識と技術をすべての関係職員に指導する。 |
| 3. すべての妊婦に母乳育児の利点と授乳の方法を教える。 |
| 4. 母親が出産後30分以内に母乳を飲ませられるように援助する。 |
| 5. 母乳の飲ませ方をその場で具体的に指導する。また、もし赤ちゃんを母親から離して収容しなければならない場合にも、母親に母乳の分泌を維持する方法を教える。 |
| 6. 医学的に必要でないかぎり、新生児には母乳以外の栄養や水分を与えないようにする。 |
| 7. 母子同室にする。母親と赤ちゃんが終日一緒にいられるようにする。 |
| 8. 赤ちゃんが欲しがるときはいつでも、母親が母乳を飲ませられるようにする。 |
| 9. 母乳で育てている赤ちゃんにゴムの乳首やおしゃぶりを与えない。 |
| 10. 母乳で育てる母親のための支援グループ作りを助け、母親が退院するときにそれらのグループを紹介する。 |

1) 岐阜県立看護大学 育成期看護学講座 Nursing in Children and Child Rearing Families, Gifu College of Nursing
 2) 岐阜県立看護大学 機能看護学講座 Management in Nursing, Gifu College of Nursing

院後に母乳育児で困ったこと(時期とその内容、受けた指導など)」「(自由記載)、「退院後、家族の援助で助けになったこと」(自由記載)、「退院後に必要だと思った地域や病院の支援」(自由記載)などである。

分析方法は、選択式の回答は単純集計を行い、自由記載は記述内容にしたがって分類した。調査期間は平成17年9月～12月であった。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮として、調査の依頼には、無記名の返答であり個人のデータとしては処理されないことを明記し、施設内の個人情報の管理に基づき施設から郵送してもらった。また、同意の承諾は返答に替えた。

III. 結果

1. 対象の概要

回収率および有効回答率は、86名(42.8%)であった。回答者の平均年齢は30.5±3.8歳、平均在胎週数は39.3±1.1週、平均出生体重は3074±348.5gであった。初産婦は39名(45.3%)、自然分娩74名(86.0%)、核家族68名(79.1%)、里帰り分娩あり49名(57.0%)であった。

2. 母乳育児期間について

86名中、67名(77.9%)が、出産後1年の時点で母乳育児を続けており、現時点で母乳育児を続けている母親が、いつまで母乳育児を続けたいかという時期は、「1歳6ヶ月まで」28名(32.6%)が最も多く、次いで「自然に離れるまで」20名(23.3%)が多かった。

3. 妊娠中の母乳育児の意識

「母乳をすすめていることを知って選んだか」という問いは、「知っていた」が53名(61.6%)、「知らなかった」が33名(38.4%)であった。また、「母乳育児についての情報をどこから得たか」という問いは、複数回答で、病院が74名と最も多く、友人が12名、親・姉妹と雑誌が10名、インターネットが5名、その他が2名であった。

妊娠中から母乳で育てたいと思っていた母親は、85名(98.8%)であった。①「赤ちゃんに最も良い栄養だから」(n=85)は、【とてもそう思う】が77名(89.5%)、【ややそう思う】が8名(9.3%)であった。②「母乳で育てるのが当たり前だから」(n=85)は、【とてもそ

う思う】が20名(23.3%)、【ややそう思う】が41名(47.7%)、【あまりそう思わない】が21名(24.4%)、【全くそう思わない】が3名(3.5%)であった。③「母乳が良いと周りから勧められた」(n=83)は、【とてもそう思う】が32名(37.2%)、【ややそう思う】が35名(40.7%)、【あまりそう思わない】が12名(14.0%)、【全くそう思わない】が4名(4.7%)であった。④「赤ちゃんとのスキンシップを大切にしたい」(n=85)は、【とてもそう思う】が71名(82.6%)、【ややそう思う】が10名(11.6%)、【あまりそう思わない】が4名(4.7%)であった。⑤「母親になったら母乳で育てたいと思ったから」(n=85)は、【とてもそう思う】が53名(61.6%)、【ややそう思う】が26名(30.2%)、【あまりそう思わない】が4名(4.7%)、【全くそう思わない】が2名(2.3%)であった。⑥「経済的だから」(n=85)は、【とてもそう思う】が49名(57.0%)、【ややそう思う】が30名(34.9%)、【あまりそう思わない】が5名(5.8%)、【全くそう思わない】が1名(1.2%)であった。⑦「母乳育児は楽だから」(n=85)は、【とてもそう思う】が34名(39.5%)、【ややそう思う】が27名(31.4%)、【あまりそう思わない】が21名(24.4%)、【全くそう思わない】が3名(3.5%)であった。

4. 妊娠中の病院、家族や周囲の支援

妊娠中の病院の支援で役に立ったことは、「おっぱいマッサージ・乳首の手入れ方法」と「母親教室・パパママ教室・マタニティービクス・ヨガ教室」31名が最も多かった。「おっぱいマッサージ・乳首の手入れ方法」の具体的な内容は、【マッサージの方法を教えてもらった】【妊娠中に乳首をみてもらい、マッサージを勧められて出るようになったと思う】【乳首の手入れを教えてもらったので、切れないですんだ】などであった。「母親教室・パパママ教室・マタニティービクス・ヨガ教室」の具体的な内容は、【マタニティービクスをしていたので、出産が楽に済み、母乳分泌に役に立った】【ヨガで呼吸法を教わり、からだが柔らかくなりよかった】【母親教室ではいろいろなことを教わり役に立った】【父親としての意識が高まった】などの回答があった。次に多かったのは、「母乳に関する知識」23名であった。具体的な内容は、【母乳の大切さ(栄養面、親子の絆)を教えてもらった】【母乳で育てるのは良いことと知ってい

ても、具体的なことは知らなかった】【母乳に対しての考え方やよさを教えてもらった】【母乳は出なければそれでいいと思っていたが、母乳のメリットなどを教えてもらい、母乳で育てたくなった】などがあげられた。「母乳に関する話を聞いてもらえた」5名という中には、【母乳に対しては、欲しがるときに好きなだけ、何度でもいくつになってもあげてよい、の一言で安心することができた】【産まれてすぐの赤ちゃんがおっぱいめがけて吸い付いていく姿を見て感動、母乳で育てたいと思った】【母乳が出なくてもあきらめずに指導し励ましてくれた】【上の子が妊娠中もおっぱいを吸っていて、大丈夫ですよと言われたこと】【母乳がでるかどうか心配だったけど、看護師さんに絶対でるよ、と言われて自信ができた】【いつでもわからないときに話を聞いてもらえた】などがあげられた。(表2)

妊娠中の家族や周囲の支援・助言は、「なかった」34名という回答が最も多かった。次いで、「母乳育児を理解・すすめてくれた」14名が多かった。支援がなかった理由として、【周りに母乳育児をしている人がいなかったから】【核家族だから助言がなかった】【ミルクを勧められた】などの回答がみられた。(表3)

5. 入院中の助産師・看護師の支援

良かったこととしては、「そばについて授乳方法の指導をしてくれた」44名が最も多かった。記述例では、【毎回授乳のたびに手伝ってくれた】【いろいろな授乳のスタイルを教えてくれた】【夜中でも何回も授乳のときに来てくれた】【飲ませやすい方法を教えてくれた】などであった。次に「励ましてくれた、自信をもたせてくれた」23名という内容が多かった。具体的には【母乳の出が悪くても、ささいな事でもほめてくれたり、励ましてくれたこと】【おっぱいの吸わせ方がわからず、不安だったが、熱心に教えてくれたこと】【いろいろな助言をくれて、安心できたこと】【初めてだが、優しい言葉をかけてもらい、安心できた】などであった。また、少数意見として、「母子同室」、「ミルクを与えないでいてくれたこと」などが挙がっていた。(表4)

良くなかったことについて記載していた母親は、8名と少なかったが、「指導の内容が人によって違う」「スタッフ不足」「母乳にこだわりすぎ」という意見がみられた。

表2 妊娠中の病院の支援で役に立ったこと (n = 86: 複数回答)

内容	人数
おっぱいマッサージ・乳首の手入れ方法	31
母親教室・パパママ教室 マタニティービクス・ヨガ教室	31
母乳に関する知識	23
母乳に関する話を聞いてもらえた	5
本、冊子による情報提供	5

表3 妊娠中の家族や周囲の支援・助言 (n = 86: 複数回答)

内容	人数
なかった	34
母乳育児を理解・すすめてくれた	14
食事について	7
赤ちゃんのためにいい(栄養面・精神面)	6
経済的に良い	4
丈夫になる	2
友人・知人からのアドバイス	2
家事の手伝い	1
上の子の世話	1
母乳の方が楽	1
母乳の子はいいにおいがする	1
回答なし	17

表4 入院中の助産師・看護師の支援で良かったこと (n = 86: 複数回答)

内容	人数
そばについて授乳方法の指導をしてくれた	44
励ましてくれた、自信をもたせてくれた	23
母乳育児などの相談にのってくれた	16
夜中でも来てくれた	13
痛みを分かってくれた	13
おっぱいマッサージ	7
リラックスさせてくれた	7
乳首の手入れ	2
母子同室	1
ミルクを与えないでいてくれたこと	1

6. 母乳で育ててよかったと思うこと

多かった記述は、「スキンシップがとれる」と「いつでもどこでも飲ませられる、すぐあげられる」29名という内容であった。「スキンシップがとれる」の具体的内容は、【子どもとスキンシップがたくさんとれた】【スキンシップができてきた気がした】【親子のスキンシップがはかれた。寝かしつけるのに楽】【母子のスキンシップがとれる】であった。「いつでもどこでも飲ませられる、すぐあげられる」の具体的内容は、【泣いたらすぐあげられる】【ぐずったとき、すぐ飲ませられる】【夜中でもミルクを作ることなく、すぐあげられる】などであっ

た。次に多かったのは、「母親として愛情が大きい」28名で、具体的には、【母親としておっぱいをあげているときは至福の時。産んでよかった、産まれてきてありがとうという気持ちになる】【お乳を吸っているところを見ると、子どもがもっとかわいく感じる】【愛されている実感、必要とされている実感があり、癒される】【起きて寝られなくてもやっぱりかわいいので続ける】【おねだりしてくるのでかわいくてしょうがない】【おっぱいと聞くと、嬉しそうによってくるのがかわいい】というものであった。「母親の特権」16名という項目は、【誰も代わりが出来ないので責任感がもてた】【母乳で育てたという自信がついた】【自分の納得がいった】と答えた母親が多かった。(表5)

7. 退院後に母乳育児で困ったこと、家族の援助、必要だと思った地域や病院の支援

退院後に母乳育児で困ったことがある母親は76.7%であった。困った時期は0～1ヶ月が最も多いが、12ヶ月までほぼ同程度であった。困った事の内容は0～1ヶ月では「体重が増えない」という児の発育に関連するものが多かった。また「乳腺炎・うづ乳」「乳頭の亀裂」など乳房トラブルも多くみられた。ほとんどが、病院に相談、または外来受診し、適切な助言や手当てを受け解決していた。それ以降の月齢でも、児の発育について、母乳不足と乳房トラブルは多かったが、1～3ヶ月になると母親の疲労、3ヶ月以降では母乳と薬の問題、離乳食の問題、夜泣きの問題などがあつた。(表6)

退院後、家族の援助で助けになったことは、「家事を助けてもらった」が最も多く、次いで、「精神的な支え」「上の子の世話をしてもらった」「短時間だが、1人になれる時間を作ってくれる」の順に多かった。(表7)

また、退院後に必要だと思った地域や病院の支援は、「相談できる場」が最も多く、次いで「同じ頃に出産した人同士のコミュニケーションの場」であった。(表8)

IV. 考察

WHOとユニセフは、1989年に10か条を共同勧告し、その2年後の1991年に、母乳育児をさらに広げるため、10か条を積極的に実践する産科施設をBFHと認定することとした⁴⁾。10か条は、主に、医療従事者に対する母乳育児の教育、母親に母乳の利点などを知ってもらう

表5 母乳で育ててよかったと思うこと (n=86:複数回答)

内容	人数
スキンシップがとれる	29
いつでもどこでも飲ませられる、すぐあげられる	29
母親として愛情が大きい	28
経済的	25
健康、丈夫	24
母親の特権	16
荷物が少なくてよい	10
精神的、体力的に楽	9
赤ちゃんの体調がよくわかる	5
体重が減った、体形の戻りが早い	3
子供の成長を感じることができる	3
栄養面でも良いと思う	1
育児ストレスにならない	1
子どもが安心する	1
食べ物の好き嫌いがない	1
寝かしつけが楽	1
ぐずった時にあげるとすぐに泣き止む	1
アトピーが軽い	1
体調を崩した時、おっぱいなら飲む	1
自己満足感がある	1

こと、出生直後の母乳開始と母子同室の重要性、授乳方法と母乳育児サポートが組み込まれており、BFHに認定されるには、10か条をすべて行っていることが前提となる。今回の調査結果では、調査時点である出生後1年の母乳育児の割合は77.9%であった。統計によると、生後1年の調査結果はないが、生後4～5ヶ月での母乳率が35.9%⁵⁾であることから、全国平均をはるかに上回っていることがわかる。また、生後1年で母乳育児を続行している母親が、1才6ヶ月～自然に離れるまでと長期の母乳育児を希望していることは、今回の研究対象がBFHで出産した母親であるということが大きく関係しているといえる。

BFHだと知って施設を選んだ母親は61.6%と過半数を超えてはいるが、すべての母親が知っているとはいえなかった。しかし、妊娠中から母乳で育てたいと思っていた母親は、98.8%と非常に高く、母乳育児についての情報源は、74名が病院ということからもわかるように、妊娠中における病院からの働きかけがあつたからだと考えられる。母乳に関する認識については、母乳そのものや母乳育児が児にとって最善のものであると思っていながらも、「母乳で育てるのが当たり前だから」と思っている母親は、【ややそう思う】が47.7%であり、【とてもそう思う】の23.3%を大幅に上回っていることから、

表6 退院後に母乳育児で困ったこと (月齢別)

月齢	困ったこと	受けた指導など
0～1ヶ月	体重が増えない	マッサージを受けた、母乳量の測定、児の体重の測定、何回も母乳をあげたら母乳がよく出るようになった、授乳指導に通った
	うまく吸えない	看護師に教えてもらった、保護器で少しずつ飲めるようになった
	乳腺炎・うづ乳	電話で対応してもらった、マッサージを受けた、入院中の助言を思い出し自分で乗り切った
	乳頭の亀裂	授乳の姿勢についての助言、薬を塗るなど対処方法の助言
	母乳ばかり欲しがる	チョコチョコ飲みも普通だと聞き安心した、何もせず母乳をあげた
	ミルクとの混合で困った	ミルクを足すように指導があったが慣れずに困った
	上の子で忙しく母乳が止まりかけた	マッサージをしてもらい母乳のあげかたについて教えてもらった
1～3ヶ月	体重が増えない	体重のチェック、飲ませ方の指導を受けた、児の飲み方もみてもらってリズムがあるからといわれ安心、マッサージを受けた
	乳腺炎・しこり	マッサージを受けた、詰まった部分を取り除いてくれた
	母乳が足りているか	保健師や病院に相談し大丈夫と言われる
	母親の疲労・睡眠不足	実家の母に手伝ってもらった、周囲の人に甘えた
	授乳間隔があかない	そのまま母乳をあげた、友人に相談した
	飲みすぎで体重が増えた	泣いてももしっかり飲んだ後なら抱っこなどして寝るまで少し我慢
3～6ヶ月	母乳の出が悪くなった	マッサージを受けた、母乳量の測定で相談ののってもらった
	乳腺がつまった	マッサージを受けた
	薬を飲むと母乳があげられなかった	薬のことを病院に聞いて安心した
	離乳食を食べない	特に相談しなかった
	離乳食に早くきり替えたほうが良いと言われた	病院に相談して、焦らないようにいわれそのようにした
外出ができない	外出を控えた	
7～12ヶ月	夜泣き・夜の授乳	母乳の子は夜中に何度もおきると聞いて安心した
	乳頭の亀裂	薬をもらった、病院に相談した、周りの人に相談しミルクにした、特に何もなかった
	乳首を噛むことによる傷	
	母乳を飲まなくなった	自分の判断でミルクに切り替え
	母親が薬を飲めなかった	薬を飲んでいない間はあげなかった、自力で直した
体重が増えない	問題なしという助言があった	

表7 退院後、家族の援助で助けになったこと (n = 86 : 複数回答)

内容	人数
家事を助けてもらった	19
精神的な支え	10
上の子の世話をしてもらった	9
短時間だが、1人になれる時間を作ってくれる	8
子供のお風呂	7
子供の世話を手伝ってもらえた	6
体調が悪い時の育児	6
母乳育児をととても理解してくれていること	4
出産後、1ヶ月間実家でゆっくりさせてくれた	2
家事をしているときに面倒を見てくれた	2
赤ちゃんが起きている時見てもらい、寝せてもらった	2
何をしても泣き止まない時抱っこしてくれた	1
寝かしつけ	1
乳房ケアの間、泣く子を見てくれる	1
回答なし	22

表8 退院後に必要だと思った地域や病院の支援 (n = 86)

内容	人数
相談できる場	15
同じ頃に出産した人同士のコミュニケーションの場	11
地域に授乳室	7
上の子の世話	2
救急外来	2
赤ちゃん連れでもよい趣味やスポーツ等の教室	2
自宅に来ての育児相談など	1
ヨガ	1
1ヶ月毎の身長・体重・頭囲・胸囲測定	1
里帰り出産後、自宅周辺地域の情報	1
保健所に母乳育児者を配置してほしい	1
育児用品の通販	1
特になし	9
回答なし	32

妊娠中から母乳育児を続けようという意思が強い母親は少なかった。また、入院中の支援として良くなかったことの中に、少数だが「母乳にこだわりすぎ」という意見が見られたことから、10か条では、母乳育児において母親と病院側の支援や考え方が一致することの重要性を示しており⁶⁾、たとえ、始めは双方の考えや思いが一致していなくても、妊娠期からの働きかけにより、共に乳に最善な母乳育児を目指していくことの必要性が浮き彫りになっている。

妊娠中の支援として、病院での支援で役に立ったことは、「母乳に関する知識」とその具体的なケアの方法であった。母乳の良さは分かっているにもかかわらず具体的な何故良いのかを教えてもらうことで意識付けになり、さらに、具体的なケアの方法を聞くことで自信がつき、母乳育児への意識が高まったと考えられる。また、家族や周囲の支援については、「なかった」と答えた母親が最も多かったが、それ以外では母乳育児についてプラスのイメージである助言が見られた。なかった理由として、【周りに母乳育児をしている人がいなかったから】【核家族だから助言がなかった】という回答から、核家族化が進むことによって、助言が得られにくい環境になっているからだと考えられる。また、身近な親からの助言が得られにくいのは、【ミルクを勧められた】という回答からもわかるように、1970年代の生後1ヶ月での母乳率が、15%という⁷⁾人工栄養が当たり前であった親世代との、母乳意識の相違であると考えられる。しかし、妊娠中からの周囲の支援・助言によって、母乳育児への意識がさらに高まり、正しい食生活を心がけ、マッサージなどの行動へとつながると考えられるため、家族や周囲の支援があればより母乳育児に対する意識が高まっていたと考える。よって、家族や周囲の効果的な支援が得られるよう、検討していく必要がある。

入院中の支援として良かったことは、「そばについて授乳方法の指導をしてくれた」が最も多かったが、「励ましてくれた、自信をもたせてくれた」という項目も多かった。授乳方法の説明に加え、できている所を褒めてもらったり、優しい言葉かけや熱心な指導で安心できたことが、母乳育児継続の鍵となっている。授乳方法がわかり実践できるだけでなく、専門職者から認めてもらうことが、母親の自信につながりやる気を起こしている

と考えられ、エモーショナルサポートの重要性が示唆された。しかし、良くなかったこととして少数ではあるが、「指導の内容が人によって違う」という意見が見られた。BFHに認定されるということは、前述したように10か条を網羅していなければならない、第2条⁸⁾からも、対象者に対するケアは統一される必要がある。また、対象者が戸惑わないためにも一貫したケアはとても重要であり、スタッフの同意が得られていることが大切である。しかし、時には、対象者の捉え方が違ったり、ケアへの個人的意見が入ることがあるため、日々、ケアの検証を怠ってはいけないことが示唆された。これは、先行研究でも指摘されている課題である^{9,10)}。

退院後の母乳育児で、困ったことがある母親は76.7%と高く、困った時期は12ヶ月までほとんど同程度であったことから、どの時期においても何らかの悩みを抱えながらも克服し継続していることが分かる。ほとんどの母親が病院に電話相談をしたり外来受診をし、適切な手当を受けていたことから、産後の母乳育児相談が有効であることが考えられる¹¹⁾。退院後の支援の紹介はもちろん、母乳育児の意識に対する妊娠中からの働きかけが、分からなければ聞くことのできる病院があるという意識を高め、効果的な母乳育児サポートになっている。何かトラブルがあれば、もう母乳育児ができないと思い自ら断念してしまうことが多い中、トラブルを克服しようとする母親と施設側の努力が一致している点は、10か条が掲げる精神¹²⁾に沿ったBFHならではの特徴といえる。

母乳で育ててよかったこと上位に「スキンシップがとれる」という項目が挙げられているが、直接母乳という肌と肌が触れ合う最も親密なスキンシップ¹³⁾ということから、この項目が上位にきたと考えられる。また、母乳の利便性を評価した項目も多く、母親の負担感の軽減にもつながっている。さらに、「母親として愛情が大きい」、「母親の特権」といった母乳育児による精神的な安定を評価した項目も多く見られたことから、スキンシップによってもたらされた安心感や幸福感¹⁴⁾が、より積極的な母乳育児行動を促し、母性意識の高まり、信頼関係の設立につながると考えられる。また、母乳育児が成功することにより、母親自身が安心し自信につながることでさらに頑張ろうという前向きな姿勢になると考えられる。

退院後に必要であると思った地域や病院の支援は、「相談できる場」や「同じ頃に出産した人同士のコミュニケーションの場」の提供であった。本対象の里帰り分娩の割合は、過半数であり、自宅に帰ってからの困ったことへの対応が分からず、相談できる場がなかったと考えられる。10か条にもあるように、母親のための支援グループ作りを助け、そのグループを紹介することが挙げられており¹⁵⁾、本研究調査場所でも、色々な教室が開催されている。里帰り分娩をした母親への対応も十分考慮し、母親のニーズに答えられているかどうかを検討し、グループの活動や方針などを分かりやすく何度も紹介することが必要であると考えられる。

退院後の家族の援助については、妊娠中に「なかった」が多かったのに比べ、ほとんどの母親が家族からの援助を受けており、特に精神的な支えが多かった。母親にとっての重要他者の発言や支援は、非常に重要であるため^{16, 17)}、家族を含めた指導が重要であり、退院後の家族の支援のみならず妊娠期からの一貫した支援を評価し、退院後を見越した支援の検討が必要である。

以上より、BFHの母乳育児支援から学ぶこととして、妊娠中からの支援では、母乳育児への理解を深める指導、母乳育児の不安を軽減し自信がもてるような指導、乳頭・乳房ケアが重要であり、入院中の支援は、必要な時にいつでも側にいて励ます、授乳方法を実際に行なう、自信がもてるような関わりが重要であることがわかった。さらに、退院後の支援では、困った時などはいつでも聞くことができるようにする、適切な対処を行なう、児の発育や母親の行なっている母乳育児について、自信がもてるよう根拠を持って説明する、などが重要である。

よって、母乳育児推進のためには、施設や地域が妊娠中から退院後まで一貫したサポートを行い、母親の立場に立って自信がもてるようケアを提供し、困った時などのサポート体制を充実させることが必要である。さらに、BFH以外の施設でも本研究で明らかになったケアを活かし、効果的な援助を展開していくことが望まれる。

V. まとめ

岐阜県内のBFHで出産した母親の母乳育児支援の実態を調査した。生後1年の時点で、母乳育児を継続している母親は、全国平均に比べ割合は高く、母乳育児

への意識も高かったが、スタッフのケアの統一やエモーショナルサポートの必要性が明らかになった。また、妊娠期からの一貫した支援を評価し、退院後を見越した支援の検討が必要である。

謝辞

本研究にご協力いただきました対象者の皆様、共同研究者である高田医院の助産師 高田恵美様、院長 高田恭宏様、西川レディースクリニックの院長 西川良樹様、西川雅子様、助産師 竹下妙枝様に深く感謝申し上げます。

なお、本研究の一部は第47回日本母性衛生学会にて発表した。

文献

- 1) 財団法人母子衛生研究会：乳児の月齢別栄養状況，母性保健の主なる統計，母子保健事業団；159，2005.
- 2) WHO/ユニセフ共同声明：母乳育児成功のために；6，日本母乳の会，1999.
- 3) 前掲 1) 131.
- 4) 橋本武夫：母乳育児とBFHI，もっと知りたい母乳育児，ネオネイタルケア秋季増刊，13(12)；65-71，2000.
- 5) 前掲 3)
- 6) 前掲 2)
- 7) 前掲 4)
- 8) 前掲 2)
- 9) 服部律子，堀内寛子，布原佳奈，他：県内産科施設の母乳育児の実態と課題，岐阜県立看護大学紀要，6(2)；59-63，2006.
- 10) 前原邦江，岩田裕子，野々山未希子，他：産褥早期の母乳育児支援において対応を決定する上で助産師が考慮する要因—提示した事例へのケア選択理由の分析から—，日本母性看護学会誌，5(1)；70-77，2005.
- 11) スケッチャーノ潤子：母乳育児支援への取り組み，チャイルドヘルス，9(4)；60-64，2006.
- 12) 前掲 2)
- 13) 橋本武夫：授乳・自然分娩と母乳育児・母乳育児と母親支援，もっと知りたい母乳育児，ネオネイタルケア秋季増刊，13(12)；10-29，2000.
- 14) 前掲 13)

- 15) 前掲2)
- 16) 井関敦子, 南田智子, 白井瑞子, 他: 授乳に関する母親の価値観に影響を与えた情報源と力, 三重看護学誌, 8; 65-73, 2006.
- 17) 浦光博: 支えあう人と人 ソーシャル・サポートの社会心理学, 初版; 62-68, サイエンス社, 1999.

(受稿日 平成18年12月6日)

(採用日 平成19年1月18日)